

こころで

見る

奈良

もっともこと  
知りたい  
奈良 5

## ■春日大社の神々

今年は、御蓋山(みかさやま)の麓、春日野にある春日大社(かつては春日社といった)が創建されて、1250年の年である。

これを記念して、奈良国立博物館は、特別展「春日大社のすべて」を開催した。

神護景雲2年(768)11月、春日社の本殿が建てられた。これをもって春日社の創建とするが、実は創建される前から春日社はあった。

霊亀3年(717)2月1日、御蓋山の麓で、遣唐使の安全祈願祭がおこなわれた。この時の遣唐使には、阿倍仲麻呂も含まれていた。

天平勝宝4年(752)、御蓋山の麓でおこなわれた春日の祭に参列した光明皇后は、遣唐大使(遣唐使のリーダー)として唐へ向かう甥の藤原清河に対して、春日の神様のご加護を願う歌を詠んだ。

天平勝宝8歳(756)に描かれた「東大寺山堺四至(さんがいししいし)図」には、御蓋山の麓に、塀によって四角に囲まれた場所が表わされており、そこに「神地」と記されている。ここが春日社だと考えられる。

発掘により、奈良時代には、御蓋山の麓に、数百坪にも及ぶ築地塀(ついでい)が本当にあったことがわかった。ただし、建物はまだなかった。建物ができたのが、神護景雲2年(768)ということになる。



御蓋山と満月

春日社の本殿は4つの建物が肩寄せ合って仲良く並んで建っており、第一殿には武甕槌命、第二殿には経津主命、第三殿には天兒屋根命、第四殿には比売神(女神)/天兒屋根命の奥様が祀りされている。

4人の神様はいずれも他所からやって来られた神様で、真っ先に来られたのは鹿島(茨城県鹿嶋市)の武甕槌命(たけみかづちのみこと)だった。このとき鹿に乗って来られたので、奈良では鹿が大切にされるようになった。

武甕槌命は奈良をすっかり気に入った。鎌倉時代に制作された「春日権現験記」によれば、武甕槌命は「月の光も、花の匂いも、春日野にまさるところはない。一緒に味わおう」と、香取(千葉県香取市)の経津主命と、枚岡(ひらおか/大阪府東大阪市)の天兒屋根命を誘ったのだそうだ。

「雪月花の時、もっとも君を憶(おも)う」と唐の白居易(はくきょい)は詠んだ。美しい自然に出会うと大切な人のことを思う。その人にも見せてあげたい。一緒に見たい。春日大社はそんなふうにして誕生した神社であった。

文・西山 厚

(帝塚山大学文化創造学科教授)

○10回シリーズ 次回は8月5日(日)掲載予定